

墮和羅國考

山本達郎

序言

- 一 墮和羅國の中心地
 - 二 盤盤と曇陵と迦羅舍佛
 - 三 陀洹と多蔑
 - 四 墮和羅國の存続期間
- 結語

序言

現在の泰國の地方にタイ人の勢力が著しく發展する様になつたのは西曆十三世紀以後であり、ビルマ國の地方に於てビルマ人の活動が活潑になつたのは西曆十一世紀の中頃からである。彼等の勢力が發展する以前に於て、是等兩國の地方にはモン人の勢力が盛んであつた。尤も泰國のメナム河(Menam)の下流域は西曆十一世紀の初

頃からカムボヂャ(眞臘)の支配下に屬してをり、タイ人の發展した當時にはメナム河の上流域にモン人の勢力があり、下流域にカムボヂャの勢力が據つてゐたのであるが、下流域の地方に於てもカムボヂャが之を領有する以前にはモン人の勢力が盛んであつた。タイ人・ビルマ人乃至カムボヂャ人の發展する以前のモン人の歴史に關しては史料が極めて乏しいけれども、ビルマのモン人に關するそれが殆んど無いに近いのと比較すれば、泰國のモン人に就いてはより多くの史料が存在してをり、彼等の殘した碑文や遺蹟・遺物、パーリ語の史書たる *Jinalamau*、*三, Canadevirayansa* などが紹介されてゐるのであつて、是等の史料と支那の文獻によつて彼等が西曆七世紀頃メナム河流域に *Dvaravati* といふ國を建て、をり、その後

西曆八世紀の頃に此の河の上流域の Lamp'in を中心として Hari-puñjaya といふ小國を作り、その國が西曆十三世紀まで存続したといふ事實を知り得るのである。^① 泰國に於けるモン人の歴史は大部分 G. Coedès 博士によつて闡明せられたのであるが、Dvāravatī, Hari-puñjaya の二國が存したと言つても、その國の政治史に就いてやゝ纏つた史實を知り得るものは後者のみであつて、前者に關してはかゝる國が存在したといふ以外に餘り多くは知られてゐない。Jinakalanālini 及 Cāmadēvivānasa 及 Hari-puñjaya に關する記録であつて、Dvāravatī に關しては此の様な史書は全く存在してゐないのである。私はこゝに墮和羅國考といふ題の下に、支那の文獻を用ひて Dvāravatī に關する若干の考察を行つてみようと思ふ。

一 墮和羅國の中心地

支那の文獻をみると唐代の知識を傳へた記録の中に Dvāravatī の國名が現れてをり、卷一通典八八・卷九七舊唐書九七には之を墮和羅と記し、卷二二新唐書二二には墮和羅または

獨和羅と爲し、卷九唐會要九・卷一釋迦方志・及び卷九七舊唐書の他の個所には墮羅鉢底、玄奘の大唐西域記卷一にも墮羅鉢底といひ、義淨の南海寄歸內法傳卷一には社(社)和鉢底と書き、彼の大唐西域求法高僧傳卷上大乘燈禪師の條には杜和羅鉢底と記してゐる。^② いふまでもなく是等の國名は何れも Dvāravatī の音譯であり、就中最後の杜和羅鉢底といふのが最も原音を忠實に寫してゐる。それでは此の國の中心地はどの地方にあつたかといふと、それはメナム河の流域の中でも下流域にあつたものと見做す事が出来る。舊唐書卷一眞臘傳には、

自神龍(A. D. 705-706)已後、眞臘分爲二、半以南近海多陂澤處、謂之水眞臘、半以北多山阜、謂之陸眞臘、亦謂之文單國、(中略)水眞臘國、其境東西南北約員八百里、東至奔陀浪州(Pāṅḍurāṅga)、^③西至墮

羅鉢底國、南至小海、北接陸眞臘。(下略)

と記されてゐるのであつて、これによると Dvāravatī はメコン河(Mekong)の下流域に位して海に臨んでゐた所の水眞臘の西にあつたといふのであるから、その國がメ

ナム河の下流域に存した事は略疑を容れない。Coades 氏によつて紹介されたモンの遺物をみると、唐代或はそれ以前かとも認められる古い佛像や碑文は、Lopburi (Labapuri), Prapatom (Brah Pathamaceitya), Ayudhya 及び Rajaburi (Rajapuri) の附近 (Tham Ruisi) に於て発見されてゐるのであつて、是等の位置から考へてみても Dvaravati の中心はメナム河の下流域にあつたと見做すのが自然である。

併し乍ら Dvaravati の國都がメナム河下流域のどの地點にあつたかといふ事は未だ明かでない。P. Schmitt 氏や L. Fournereau 氏は此の國を Ayudhya に比定してゐる^④。P. Pelliot 氏はその都を Lopburi 附近に求めてゐるけれども、^⑤是等の説を證明する所の確實な史料は見當らない。殊に Ayudhya 説は、此の町が西曆十四世紀に建てられる以前にそこに都城があつたといふ確證がない所からみて頗る疑はしいのであつて、Ayudhya に於ては所謂 Dvaravati 式の古い佛像が発見されてはゐるけれども、それが本來此の地で作られたかどうかといふ

點に猶ほ疑問があると言つてよからん。Ayudhya, Lopburi の外に近年特に學者の注意を惹く様になつた遺蹟は Prapatom であつて、泰國と佛印の遠東博古學院との共同の發掘が P. Dupont 氏等によつて行はれた結果、此の地からは所謂 Dvaravati 式の多數の遺物が見出されてゐる^⑥。而して更に此の外に猶ほ U Tong の古城址がモン人の歴史を考へる際には問題となるのであつて、此の地で發見される遺物は Damrong 親王並びに H. G. Quaritch Wales 氏によると、やはり所謂 Dvaravati の系統に屬するといふ事である。^⑦ U Tong の町に關しては會てその支配者であつた人物が此の町を棄て、Ayudhya を建つた事が傳へられてゐるのであつて、U Tong の城がいつから存在してゐたかは未だ明かでないけれども、兎に角それは Ayudhya 建設以前の重要な中心地であつたと見做される。私は Dvaravati の國都に關しては推測を行ふ事を差控へて、今のところ Lopburi の外に Prapatom 及び U Tong が、會ての重要な中心地として注意されるといふ事を指摘するに止めたい。U

T'ong に於ては未だ組織的な發掘は行はれてゐないのであり、Pratton の發掘も今後繼續せられるべき性質のものであつて、是等の地に於ける考古學的研究は有名な P'ong Tuk の發掘の結果などと共に Dvaravati の歴史に新たな光明を與へるであらう。

二 盤盤と曇陵と迦羅舍佛

よて然らば Dvaravati の中心はメナム河の下流域にあつたとして此の國の勢力は如何なる地方に及んだであらうか。こゝに新舊唐書の記事を検討しながらその政治的勢力に就いて考へる事とする。舊唐書^{卷一}九七には、

(A) 暹和羅國南與盤盤、北與迦羅舍佛、東與真臘接、西鄰大海、去廣州五月日行、(B) 貞觀十二年(A. D. 638) 其王遣使貢方物、二十三年(A. D. 649) 又遣使獻象牙・火珠、請賜好馬、詔許之、

とみえてゐるが、是が暹和羅の傳の全文である。新唐書^{卷二二}二下をみると訶陵に關する記事の續きに、

(A) 暹和羅亦曰獨和羅、南距盤盤、北迦羅舍佛、西

屬海、東真臘、自廣州行五月乃至、(B) 國多美犀、世謂暹和羅犀、有二屬國、曰曇陵・陀洹、曇陵在海洲中、

と記されてをり、之に續く記事は陀洹國の説明となつてゐる。右の兩書の記事を比較してみると、明かに新唐書のAは舊唐書のAに基いたものであり、舊唐書のBは新唐書に於て省略されて、その代りに新唐書には別の史料に基いてBの記事を書き加へた事がわかる。

先づ暹和羅國の南境をみると、それは盤盤と接してゐたといふ事であるが、盤盤は梁書^{卷五}四にも同様に盤盤として記されてをり、舊唐書^{卷一}九七には、

盤盤國在林邑西南海中、北與林邑隔小海、自交州船行四十日乃至、其國與狼牙脩國爲隣、皆學婆羅門書、甚敬佛法、貞觀九年(A. D. 635) 遣使來朝、貢方物、

といひ、新唐書^{卷二二}二下には舊唐書よりも稍詳細な記事がみえてゐる。盤盤は曾し W. P. Groeneveldt 氏が之をライ半島東海岸の Bandon 方面に比定し、Pun Pin

の音譯と見做して以來、その國の大體の位置に關しては諸學者の見界が一致してゐる。而して高桑駒吉氏は右の Pun Pin 以外にまた半島の西海岸に Junk Ceylon 島 (Pulao Puket) と相對して Pun Pin という地名の存する事をも指摘した。盤盤は馬來半島上の印度文化を受けた重要な國であつたのであるが、近年の考古學的研究によると Bandon 灣の附近は曾て甚だ重要な中心地であつた事が明かになつて來たのであつて、盤盤を此の附近に比定する事は極めて自然であると思はれる。Bandon から半島を横斷して西海岸に抜ける道は重要な一つの交通路であつたのであり、盤盤國も交通の要衝に位して特に發展したのであらうと考へられる。猶ほ右の舊唐書の記事では狼牙脩國が盤盤國に隣する事となつてゐるのであるが、狼牙脩國は藤田豐八博士によつて Patani の地に比定されてをり、この説は大體に於て正鶴を得たものと認められてゐるのであつて、それは盤盤國の南に隣する國と見做す事が出来る。

前に掲げた新唐書の B の記事によると、墮和羅には曇

陵・陀洹といふ二つの屬國があり、曇陵の方は海洲中にあつたといふのであるが、私は曇陵は多分 Dhāravati の南方にあつた屬國ではなかつたかと考へる。恐らく此の國は馬來半島上に存したのであつて、諸蕃志に三佛齊の屬國として記されてゐる所の單馬令國に相當すると見做してよいのではあるまいか。馬來半島の Jaiya に於ては Kalyuga 4332 (A. D. 1230) といふ年次のみえてゐる不正確な梵語の碑文が發見されてゐるが、その最初の部分には Cī Dharmarāja 王であり Tambralinga の支配者である所の Candrabhanu に關する讃辭が記されてゐるのであつて、此の人物は Nagara Cī Dharmarāja 即ち Liçor の王であると同時に Jaiya の方面に存した所の Tambralinga をも領有してゐたものと考へられる。諸蕃志の單馬令は此の Tambralinga の音譯に他ならぬ。Jaiya の碑文及び諸蕃志は共に西曆十三世紀の前半に書かれたものであるけれども、此の Tambralinga といふ地名はそれより以前餘程古くから存在してゐたのであつて、十一世紀前半 (A. D. 1030) に書かれた所の Tanjore

發見の Rajendracoja I の タミール語の碑文には Madama-
 ingam として現れてゐる。—— Ma は mala 即ち大の
 義である——Sylvan Levi 氏の研究によると、古く二世
 紀或は三世紀に書かれたと見做される所の Mahanidesa
 の中にも馬來半島方面の國名として Tamalin, Tambalin-
 gain の名前が記されてゐるのである。⑩ 即ち Tambalinga
 といふ名稱は曇陵國の時代にも當然存在してゐたわけだ
 あるから、曇陵を以て單馬令と同様にその音譯と見做し
 て不都合はない。曇は日本の漢音がタンであつて、Can-
 tana を置疊と書く場合の如きを思ひ併せてみると、そ
 れを tam, tam の對音と見做す事は極めて自然であり、
 また陵を lin の對音と見る事にも全く支障はないのであ
 る。

但し Tambalinga の正確な位置を決定する事には若
 干の疑問の餘地が存する様であつて、それが Java の附
 近であるとする、前述の盤盤國の位置と似通つた所と
 なるわけである。此の様な位置から考へてみると、曇陵
 と盤盤の二國の間には何か特別な政治的な關係が存在し

てゐたと推測する可能性もない様であり、又既
 述の如くに曇陵の名の現れてゐる新唐書の B' の記事と、
 盤盤の名の記されてゐる新舊唐書の A A' の記事とが別系
 統の史料である所からみると、兩種の記事にみえてゐる
 所の馬來半島方面の形勢には年代的な相違があるので
 ないかといふ見方もあり得るわけであるけれども、私は
 こゝでは曇陵と盤盤とを以て同時に近接して存在した所
 の獨立の二國であつたと考へて置く。冊府元龜^{卷九}によ
 ると曇陵國は貞觀十六年 (A. D. 642) に入貢してゐる
 が、唐會要^{卷九}をみると、「曇陵吐火羅之屬國也、居大洲
 中、其風俗土宜與吐火羅國同、貞觀十六年遣使朝貢、」とあ
 つて、こゝでは曇陵は中央アジアの吐火羅の屬國となつ
 てゐる。併し乍ら恐らく是は曇陵といふ同名の國が二つ
 あつたといふのではなく、「吐火羅之屬國」は「墮和羅之屬
 國」の誤で、吐火羅と墮和羅とは音韻が類似してゐる所
 から混同されたのではあるまいか。而して曇陵を吐火羅
 の屬國と考へた所から恣にその風俗土宜を吐火羅と同じ
 であると記したのではなからうか。新唐書にも唐會要に

も曼陵は大洲中にあつたといつてゐるのであるから、之を中央アジアの吐火羅の屬國であると認める事は困難である。併しいま萬一を慮つて曼陵が墮和羅の屬國であるといふ新唐書の傳へに誤があると假定してみても、Dvaravati の南境は盤整國の位置から考へて大體之を想定する事が出来るわけである。

右の如くにして Dvaravati の勢力が南方どの地方に及んでゐたかといふ大體を知り得るのであるが、此の様な南方に於けるモン人の勢力の問題は馬來半島中部以南の歴史とも關係を持つて來るのであり、Semang や Sakai の文化、特にその言語の性質が之と關聯して問題となつて來る。Semang や Sakai の言語は Mon-Khmer 系の言語と密接な關係があつて、彼等は大きくみて二回以上 Mon-Khmer 系の民族と接觸したものと考へられてゐる。Semang, Sakai の言語を Mon-Khmer 諸語なると共に南アジア語 (Austroasiatic) の一部と見做す説には若干の疑問があるかも知れないが、兎に角是等の言語が Mon-Khmer 系の言語と密接不可分な關係を有する事は

明瞭である。而して Semang や Sakai の單語の中には Mon-Khmer 系と言つても、特にモン語に近いもののある事實をも注意して置く必要がある。Semang や Sakai が會つて Mon-Khmer 系の民族と接觸してゐたとしてみると、後者の勢力が馬來半島に及んだ時期が問題となるのであつて、Dvaravati の南境はこの意味に於て特別に我々の注意に上るのである。私はいま Semang や Sakai が Mon-Khmer 系の言語の影響を被つた時期を、Dvaravati の時代として限定しようといふのではなく、扶南や眞臘の勢力がマライ半島に及んだ時代その他を考慮に入れるのであるけれども、Dvaravati の時代に何かの影響を受けたと見る事は不自然な推測でないと思へる。

Dvaravati の南境は右の如くであるとして、次に此の國の北境を注意してみると、嚮に掲げた新舊唐書の A A' の記事には北に位する國を迦羅舍佛・迦邏舍弗と爲してゐるが、卷一 通典八八には、

哥羅舍分在南海之南、地接墮和羅國、勝兵二萬人、其王滿越伽摩、大唐顯慶五年(A. D. 660)遣使朝貢、

といひ、唐會要^{卷一}にも之と似寄つた記事が載せられてをり、冊府元龜^{卷九}七〇にも哥羅舍分の名が現れてゐる。哥羅舍分と迦羅舍佛とは同じ國に相違なく、隋書^{卷三}にみえる所の大業四年(A. D. 608)に入貢した迦邏舍といふ國も同じであると思はれる。併し乍ら冊府元龜の記事をみると、此の國の位置に關してA' A'とは異つた傳へがあつて、「哥羅舍分國在南海之南、東接墮和羅」と述べてゐるのであつて、此の國は墮和羅の北にあつたか西にあつたか明確でない。藤田博士は曾て此の事實に注意して論文「狼牙脩國考」の中に於て、「冊府元龜は唐代の記録をその儘傳へたるに似たれば、後者^{冊府元龜}の所傳を以て正とすべきに似たり。Ayuthyaの西南遠からず、今 Rajpuri, Rajaburあり、迦羅舍・哥羅舍は Rajaの音譯なるべく、猶ほ葛羅蘭を以て Rajaの對音となすが如し。佛若くは分の purの對音なることは殆ど疑なかるべし。」と言つてをられる。併し乍ら此の説には俄かに從ひ得ない。メナム河の流域に中心を有する Dvaravati が相當に大きな國でその勢力がマライ半島の中部に及んでゐたとする

ならば、Rajaburi は當然その領域の内に含まれてゐたと見做すべきであらう。地勢の上からみてメナム河の流域には、それを區劃するべき著しい自然の障壁はないのであるから、Dvaravati と並んで之と隣する別の國が Rajaburi にあつたとみる事は寧ろ不自然であり、又藤田博士の説は國名の音譯法に就いても少しく無理があると思はれる。西曆十一世紀の頃に書かれた Kathasaritsasara の中には Samudrasura といふ所の商人が航海して Suvaradvipa の都である所の Kalasapura に赴いたといひ、而して商人が難船して Kalasapura に漂着したといはれてゐるといふ事であり、Pelliot 氏は古く藤田博士の研究に先立つて哥羅舍分を以て此の Kalasapura の對音と爲し、近年 R. C. Majumdar 氏も同じ見界を採つてゐるのであるが、私は此の説に從ふべきであると考へる。Kalasapura の正確な位置は明かでないが、それはビルマ南部の海岸地方であつて Mergui, Tonasserim 方面から Sittang, Salwin 兩河の河口方面に至る地方に求めてよいのではないであらうか。若しも哥羅舍分が此の

海岸地方の北部にあつたとするならば、それを墮和羅の北といつても大いなる誤ではないであらう。

三 陀洹と多蔑

前に掲げた所の新唐書のBの記事によると、墮和羅の屬國として曇陵と並んで陀洹といふ小國があつたといふ事であるが、此の國に關しては通典卷一八八に、

陀洹國在墮和羅西北、大唐貞觀中、遣使獻鸚鵡、毛羽皓素、頭上有紅色數十莖、與翅齊、

とみえてをり、冊府元龜卷九六〇にも陀洹國は墮和羅の西北

にありといひ、又同書卷九五七には陀洹國に關して「東南與

墮和羅接」といひ、「資服於墮和羅」と述べてゐる。然らば

陀洹國は之をどこに比定するべきであるかといふのであるが、それに就いては唐代の文獻に此の國の西に位して

ゐる國が記録されてゐる事を注意しなければならぬ。

即ち通典卷一八八には多蔑國に關する記事があつて、

多蔑國、大唐貞觀中通焉、在南海邊界、周廻可一月行、南阻大海、西俱游國、北波刺國、東陀洹國、戶

口極多、置三十州、不役屬他國、有城郭宮殿樓櫓、並用瓦木、以十二月爲歲首、其物產有金・銀・銅・鐵・象牙・犀角・朝霞・朝雲、其俗交易用金・銀・朝霞等衣服、百姓二十而稅一、五穀蔬菜與中國不殊、

といひ、陀洹國は多蔑國の東に位すると言はれてゐるのである。唐會要卷一〇〇には、相當に出入はあるけれども此の通典の記事と似寄つた傳へがみえてをり、冊府元龜卷九七にも多蔑國の東を陀洹國と爲すといふ記載が存する。

新唐書卷二二には名蔑國の名が現れてゐるが、是は多蔑の誤に他ならない。そこで次に先づ多蔑國の位置を決定して置いて、然る後に陀洹の比定を行ふ事とする。

多蔑國は南海の邊界に在つて、南方は海に面してゐる所の大國であるが、恐らく是は印度の最南部に比定して誤ないであらう。即ち私は此の多蔑を以て、南印度の重要な民族名たる Tamil 乃至は彼等の國を意味する Tamikam の音譯であらうと考へる。多蔑を Tamil の對音とみる事には少しも不自然がない。いふまでもなく Tamil は Dravida 系の民族として最も重要なものであり、

Dravida といふ名稱そのものも、本来 Tamil と同じ言葉であると認められてゐる。²⁶⁾而して此の Tamil といふ名稱は餘程古い時代から行はれてゐたのであつて、西方の記録に於ても西曆紀元一世紀に書かれた Erythra 海案内記の中に彼等の住地は Lannica (Dannica) といふ名前で見られてゐるのであるから、その名前は我々がいま問題としてゐる唐時代に於ても當然存在してゐたわけである。Dravida 人の住んでゐる印度の最南部の地方は、地理的にみて東西交通の上に重要な位置を占めてをり、又産物も豊富な地方であつて、彼等は極めて古くから西方の諸國と貿易を行ひ、又東方の諸國とも少からぬ交渉を持つてゐた。前漢書卷八下地理志に、支那の使者が赴いた國であるとして記されてゐる所の黄支國 (Conjeveram) は彼等の住地に近く位してをり、²⁷⁾降つて元の時代には此の印度の最南部は西洋と呼ばれて、支那人の赴く重要な貿易の中心となつてゐたのであつて、²⁸⁾唐代の文獻に此の方面に關する記事が現れて來るのは極めて當然であると思はれる。

然らば通典にみえる所の多婁國の北にあつた波刺國といふのはどこであるかといふと、此の音を當嵌めるのに適當な名稱としては、誰しも Pallava 及び Pala といふ重要な二つの國の名前を思ひ起すであらう。印度東南海岸の Pallava 國は西曆三世紀の頃から存在してゐて六世紀から八世紀にかけて盛に活動してをり、一方ガンガ河流域の Pala 國は八世紀の中葉に勃興して十二世紀の頃まで存続したのであるが、²⁹⁾私は波刺國を前者に比定するべきものと考へる。Pallava 國が Tamil 人の住地のすぐ北に接してゐた所からみると、此の様に比定するのが穩當である。通典の波刺國は如何にして支那に知られたのであるかといふと、唐代の文獻に此の國は獨立の朝貢國としては現れてゐない様であつて、恐らくそれは多婁國の朝貢の際に多婁國に關聯して傳へられたのではないかと推測される。冊府元龜^{卷九}には龍朔元年(A. D. 661)に多婁國が入貢した旨を記してゐるが、通典には此の國が貞觀年間(A. D. 627-649)に通じた旨を記載してをり、通典の記事は貞觀の頃の知識を傳へたものゝ如くに

見受けられる。波剌國が多蔑國の入貢の際に知られたといふ右の推測が若しも許されるとするならば、多蔑國の入貢は西曆七世紀の事で「Pa」國の勃興以前となるから、波剌國を「Pa」國に比定する事は困難になるわけである。それでは次に通典に多蔑國の西にあるとされてゐる俱游國はどこかといふと、それと音韻上類似してゐるもの「Cujana (Gujan)」がある。Cujana は西曆七世紀の初頭から史上に現れてをり、八世紀の頃に大勢力となつた民族であるが、惟ふにそれが俱游として知られたのはあるまいか。但しかう考へてみると Cujana などのは彼等の住地を多蔑國の西といふのはやゝ正確を缺いてゐる事となる。併し乍ら支那の文獻に於て、西天竺を印度の最南部の西と稱した例は他にも存在してゐるのであつて、諸蕃志をみると印度最南部の注聳國 (Chola) の條に、「西至西天竺千五百里」といつてゐる。

前に掲げた通典の多蔑國に關する記事の中には、特に之を「Tamil」に比定するのに特に不都合なものは今のところない様であるが、新唐書^{卷三二}の名蔑國の條、並び

に文獻通考^{卷三二}の多蔑國の條には、此の國の風習に關して次の様な注意すべき記事がみえてゐる。

多蔑國、其人短小、兄弟共娶一妻、婦總髮爲角、辨夫之多少、

此の記事によると多蔑國の間は polyandry (一妻多夫制) を行つてゐたといふのであるが、いま印度の方面に於て polyandry の風習が多く行はれてゐる地方を求めると、それはヒマラヤ山脈附近のチベット人の居住地と、印度半島の最南部の地方とが問題となる。印度の最南部に於ては Tamil 族の一種たる Nayar、及び Toda 族の間にその風習があり、此の地方の polyandry に關しては十六世紀中葉の Fredericke の旅行記を始めとして多くの報告が存在してゐる。元來 polyandry には、夫同志の間に兄弟の關係がある所の fraternal polyandry と、かゝる關係のない matrarchal polyandry とがあるのであるが、新唐書・文獻通考にみえるのは fraternal polyandry であり、Toda 族の場合もそれである。Nayar 族の場合は多く matrarchal polyandry であるが、S. Ma-

師の報告によると、六人の兄弟の中で四人が一人の妻を持ち、他の二人が別の一人の妻を持つといふ例があつて、Nayarには fraternal polyandry も存在した事が知られるのである。V. Kanakasabhai 氏は Kalfih-thokai を用ひて往時の Tamil 人の風習を研究してゐるが、それによると昔 Tamil の女子は頭髮を五つに分けて之を編み、更にそれを束ねて末端を後にたらしめてゐたといふ事であつて、「婦總髮爲角、辨夫之多少」とあるのは此の様な特徴のある頭髮に就いて述べたものであらうと思はれる。但し夫の多少を辨じたといふ記事には、或は支那人の想像が加つてゐるかも知れない。

猶ほ唐代の文獻には印度に對して東・西・南・北・中の所謂五天竺の名稱が用ひられてゐるのであるが、この五天竺は印度の南端までを全部包含したものではなくて、南天竺といふのも Deccan の Chalukya 國や、Pallava 國を言つてゐるのであるから、更にその南方の Tamil 人の住地に對しては別個の名稱があつて然るべきである。Tamil 人の國としては、古くから Chola, Chera,

Pandya の三國が重要であるが、西曆七世紀の初頭から Pandya 朝が隆盛となり、此の國は十世紀の前半に Chola 國に亡ぼされるまで活動してゐたのであつて、獨立の有力な國たる多婁國は、Tamil の中でも特に Pandya 國を指したものとみて不可ないであらう。曾て桑田六郎博士は多婁國を Tamralipu に比定し、その北の波刺國を Pataliputra、西の俱游國を Gaya と爲して居られるが、併し私は、多婁及び波刺といふ文字の音譯法からみても、多婁國の polyandry の風習からみても、此の國を印度の最南部に比定する方が穩當であると考へる。

さて右の如くに多婁國が印度の最南部にあつたとすると、問題の陀洹國とはどこであらうか。陀洹國は Dairavah の屬國であつてその西北に位してをり、また多婁國の東に當るといふのであつて、前者の傳へによるとそれはビルマの方面に存したものとらしく、後者の傳へによると Andaman, Nicobar の兩諸島の方面にでも求めるべきものゝ様であるが、恐らく是は前者の解釋を採るべきであらう。隋書^{卷八} 眞臘傳をみると、

眞臘國在林邑西南、本扶南之屬國也、去日南郡舟行六十日、而南接東暹國、西有朱江國、(中略)其國與參半・朱江二國和親、數與林邑・陀桓二國戰爭(下略)

と記されてゐるのであつて、陀桓即ち陀洹國が數ば眞臘と争つたといふ所からみると、陀洹を Andaman, Nicobar 兩諸島の地に比定する事は困難であらうと思はれる。是等の諸島は甚だ文化程度の低い民族の據つてゐる所であり、地理上から考へてもこゝに眞臘と争つた様な相當に有力な國があつたとは考へられない。諸蕃志の注輦國の條をみると、その地に赴く道順として「或云蒲甘國亦可往」と述べてをり、蒲甘(Pagan)即ちビルマと南印度との間に航路が存したらしい事を傳へてゐるが、或は此の様な航路があつた所からビルマ方面の陀洹國が多蔑國の東と考へられたのであるかも知れない。

唐の時代にビルマの地にはチベット＝ビルマ系の民族の建てた驃國が存在してゐて、Promeの地(Hinawza)を中心と爲してをり、その國は Citksetra と呼ばれてゐたのであつて、陀洹國はビルマといつても驃國とは異なる

地方に求めるべきものと思はれる。Hmannan Yazawin などのビルマの史書によると、ビルマ人の勢力は Pagan の Anawrahta の時代、西曆十一世紀の中葉に發展して Irrawadi, Salwin 兩河の河口附近一帯の地方をその支配下に置く様になつたといふのであり、それ以前には此の地方にモン人の勢力が強かつたのであるが、恐らく陀洹國は此の方面のモン人の建てた國ではなかつたであらうか。Anawrahta がモン人を征服した當時には、

Thaŕn がモン人の住地の最も重要な中心地であつた如くに傳へられてゐるが、ビルマ人が Thaŕn と呼ぶ所の此の町をモン人は Sathum と稱してゐるのであつて、陀洹を Thaŕn に比定するのは困難な様である。Irrawadi, Salwin 兩河の河口方面の幾つかの中心地の中で、古くから Rangoon は重要な地位を占めてゐたと認められるのであるが、私は、陀洹・陀桓を以て Rangoon に比定してよいと考へる。Rangoon といふ名前は十八世紀の中葉に Alompra が名附けてから後に行はれる様になつたものであつて、それ以前には此の地は Dagon と呼

ばれてゐた。^① 即ち有名な Siwe Dagon Pagoda の Dagon である。陀洹・陀桓は此の Dagon の對音に他なるまい。猶ほ唐會要^{卷九九}・新唐書^{卷二二}には、陀洹と同じ國を指したと見做される所の耨陀洹・眞陀洹・乾陀洹の名が現れてゐるが、是等の耨・眞・乾の文字は或は Dagon といふ名稱の前に置かれた何かの語を寫したものではないであらうか。桑田博士は眞陀洹を “Sringara, Champa” と爲し、耨陀洹はマルマの Tagaung を云ふのであらうと言はれ、耨と眞とは同じく梵語の Shi (Si) をうつすのではないかと見て居られるのである^②。私は右の如くに陀洹 Rangon 説を提唱して置く。

四 墮和羅國の存續期間

以上述べて來た所を綜合してみると、Dvatavati の勢力は相當廣範圍に及んだものと認められるのであるが、然らば此の國は何時の頃から勃興し、又何時の頃まで榮えて居つたのであらうか。此の問題に直接解答を與へる史料は殆んど全くないのであるが、次に他の諸國の形勢

の上から若干の推測を行ふ事とする。隋書をみると、そこには Dvatavati といふ音を寫したらしい國名は全く見當らず、前に掲げた同書の眞臘傳の記事にも陀桓などの國名は記されてをり乍ら、Dvatavati に關する記載が全く缺けてゐるのであつて、當時此の國は未だ盛になつてゐなかつたのではないかと思はれる。隋書の眞臘傳に「西有朱江國」といひ、又「其國與參半・朱江二國和親、數興林邑・陀桓二國戰爭」と述べてゐる所からみると、朱江國はメナム河流域に比定するのが自然であるが、いま此の比定が正しいとしてみると、メナム河流域に關して隋書に朱江國があつて Dvatavati が見當らず、唐代の記録には反對に Dvatavati があつて朱江國がない事となるのである。尤も唐會要^{卷九}の眞臘の條には「南接車渠、西接朱江國」といひ、通典^{卷一}にも同様な傳へがみえてゐるけれども、是等は隋書の記事をそのまゝ採つたものに他ならないであらう。朱江國と墮和羅國を同一の國とみる事は寧ろ不自然であるから、是等は別々の二國であつて、朱江國に代つて墮和羅國が發展したと

見做すのがよいのではあるまいか。^⑨

參半國に就いては新唐書^{卷二二}の眞臘傳に「文單西北屬國參半」とあつて、此の國は文單即ち陸眞臘の西北に位置してゐたといふ事であり、又同書^{卷二二}の扶南傳には、

扶南西人皆素育膚理如脂、居山穴、四面峭絶人莫得至、與參半國接、

とあつて、それは扶南の西の山地の近傍に求めてよい様である。泰國東北部、Pekok 河流域の Cruleb からは、西曆五・六世紀とみてよささうな古い書體の梵語の碑文が發見されてをり、又略同時代のもものとみて不都合のない彫刻の類が見出されてゐるのであるが、恐らく參半國は此の Cruleb の附近に比定してよいであらう。^⑩ 私は朱江國に代つて勃興した所の Dvavani の勢力は參半國を従へるまでに至らないで、參半國はいつの頃からか眞臘に屬する様になつたのではないかと考へる。Dvavani の北境は既述の如くに明確を缺いてゐるのであるが、舊唐書^{卷一七}の驛國の傳には「東隣眞臘」とみえ、新唐書^{卷二二}の同國の傳には「東陸眞臘^東西南墮和羅」といひ、

新唐書^{卷二二}の眞臘傳には、「世與參半・驛通好、」とあり、驛と眞臘とは互に相接して連絡があつたらしいのであつて、Dvavani の勢力は少くも此の頃には泰國の北部には強く及ばなかつたと思はれる。

さて隋書には前述の如くに Dvavani に關する傳へがないのであるが、通典^{卷一八八}をみると、次の如き注意すべき記事が載せられてゐる。

投和國隋時聞焉、在海南大洲中眞臘之南、自廣州西南水行百日至其國、王姓投和羅、名脯邪乞遙、^略^中

國人乘象及馬、一國之中馬不過千匹、^略^中有佛道有

學校、文字與中夏不同、訊其耆老云、王無姓、名齊杖摩^拔、^略^中大唐貞觀遣使奉表、^略^下

惟ふに隋の時代に支那人に知られた此の投和國は、Dvavani ではないであらうか。曾て桑田博士は投和を以て墮羅鉢底と同一なりと認め、その後桑田博士は之に反對する説を唱へてをられるが、^⑪是は桑田博士の見界に従ふ方が總當であらう。大洲中にありとか、眞臘の南にありとかいふ傳へはやゝ不都合であるけれども、王の姓で

あるといふ投和羅は、墮和羅・獨和羅と同様に Dvārā-
 の對音と見做してよい様である。國名を王の姓として誤
 記する事はさして不思議ではないのであり、特に同じ右
 の記事中に「王無姓」といふ矛盾した記載がある所からみ
 ると、投和羅が實際に王の姓であつたかどうかは甚だ疑
 かしい。舊唐書の墮和羅の傳によると、此の國は貞觀年間
 に好馬を賜らん事を請うて許されたといふのであるが、
 それは投和國の人が馬に乗り、而も馬が少かつたといふ
 通典の傳へと思ひ併せるべきものゝ様である。新唐書^二
 二二には墮和羅の外に投和の傳がみえてゐるけれども、
 その内容は通典から取つたものに他ならないのであつ
 て、新唐書の編者は是等二つの記事を無批判に並存せし
 めたものに他ならない。朱江國及び投和國に關する右の
 推測が許されるとするならば、大體に於て Dvārāvati は
 隋の末頃から勃興したものと見る事が出来るのではある
 まいか。

然らば此の國はいつの時代まで續いて活動したであら
 うか。嚮に問題とした所の舊唐書の眞臘傳をみると、水

眞臘の西が墮羅鉢底國であつたといふのであるが、同じ
 眞臘の傳によると本來一つであつた所の此の國は神龍年
 間 (A. D. 705-706) 以後に分れて水陸兩眞臘となつた
 といふのであつて、Dvārāvati は水眞臘と同時代に存在
 してゐたのであるから、それが少くも神龍の頃、即ち八
 世紀の初まで存続した事は疑を容れない。その後メナム
 河の下流域は西曆十一世紀の前半に位にあつたカムボヂ
 ャ王 Sūryavarman I (A. D. 1002-1049) の支配を受け
 てをり、是より先に彼の父たる Ligor 王が既に此の地
 を征服した事が認められてゐるけれども、八世紀の初頭
 以後此の時に至るまで三世紀近くの間此の方面に如何
 なる變動があつたかは明かでない。西曆七世紀の後半に
 勃興した所のスマトラの Chivijaya 國の勢力は西曆八
 世紀にはマライ半島に及んでをり、半島の Viengsa 發
 見の碑文 (A. D. 775) に於て Chivijaya 國王の徳を
 頌へる言葉がみえてゐるのであつて、Dvārāvati 國の南
 境は先づ此の Chivijaya の壓迫を被つたと推測されるの
 であるが、Dvārāvati 國の中心地帯がどうなつてゐるか

不明である。唯こゝに強ひて推測を行つてみるならば、三世紀に近いこの不明の期間の中でも、或は可成りに早く八世紀の頃に於て此の國には政治的變動があつたのではないかと思はれる。G. Coedes 氏の研究によつて知られる如く、*Jhakatamihini* 及び *Camadevivansa* の傳へを検討してみると、メナム河の上流域方面には西暦八世紀の頃に *Haripunjaya* の國が出来てをり、此の國を建てた *Camadevi* はモン人の住地の一中心であつた所の *Lavo* (*Lopburi*) の王女であつた事が知られるのであるが、*Haripunjaya* の建國は、或はメナム河下流域に於ける何かの政治的な變動と並行して起つた事件ではないかと推測する可能性も存する様に思はれる。

いま此の様に八世紀の頃に何かの政治的な變動があつたとしてみると、こゝに思ひ起して置かなければならぬのは當時のカムボヂヤ方面の形勢である。水陸兩眞臘が並び存した西暦八世紀のカムボヂヤの歴史は、碑文が極めて乏しい所から著しく不明であるが、此の時代にカムボヂヤには南方から外國の勢力が及んでゐた様であ

る。九世紀の初頭にカムボヂヤを再統一した *Jayavarman II* は *Slok kak thom* 碑文の傳へる所によると“Java”から歸つた人物であり、カムボヂヤが“Java”の支配を受けないで獨立の支配者を戴く様に儀式を行つたといふ事である。一方 *Champa* に於ても、西暦八世紀後半の碑文によると、舟に乗つて海外から渡來した異人種が此の國の南部を劫掠したといふ事であつて、八世紀の頃には、南方の大國たる *Crivija* 乃至は之と密接な關係にある *Java* の勢力が印度支那の地方に及んでゐたと見做される。⁽¹⁰⁾ 西暦十世紀初期 (ca. 916) *Abu Zayd Hasan* の記録によると、會つて *Zabag* (*Javaga*) の *Malatia* が *Khmer* の國に出兵して王の首を斬り、その後 *Khmer* の諸王は朝起きると *Zabag* に向つて敬意を表する旨が傳へられてゐるが、是も亦八世紀頃のカムボヂヤ國の形勢を反映した記事であるだらう。⁽¹¹⁾ 西暦八世紀にはマライ半島の *Viengsa* の地、*Crivija* の勢力が確立してをり、一方 *Crivija* 乃至 *Java* の勢力がカムボヂヤに強く及んでゐたとしてみると、此の様なマライ

系の勢力が直接或は間接にメナム河の下流域に影響を與へたといふ事がないとは言へない様である。かう考へて來て、こゝに特に注意されるのは、P. Dupont 氏が指摘してある如くに、所謂 Dvāravatī 式の遺物を多く出土せる所の Prapatom の地に對して Si Vicai 即ち Crivjaya といふ別名が存在してある事である。或は是

は Crivjaya 國の勢力が北方に大きく發展した時代の名殘を留めたものであるかも知れない。八世紀にモン人の建つた Haripunjaya はタイ人が之を倒すまで久しい間續いたのであるが、一方 Dvāravatī の名稱は八世紀の初期より後の文獻には全く見當らず、Jmakānānīnī や Cīnādevivānasa じふんしの記載を缺いてゐる。Dvāravatī の中心地方に八世紀の頃に何かの政治的な變動があつたとみる事は、強ち無理な推測であるとも言はれないであらう。

結 語

以上史料不足の爲に、推測の範圍を出なかつた個所が

少くないが、是を以て Dvāravatī 國の疆域とその存続期間に關する一應の考察を終る事とする。所謂 Dvāravatī 式の考古學的遺物に關しては研究すべき點が多いのであるが、こゝでは總て省略に従ふ事とした。此の一文を草するに當り、江上波夫氏が參考文獻を貸與せられた事に對して深く感謝の意を表す。

① G. Coedès; Documents sur l'histoire politique et religieuse du Laos occidental. BEFEO. XXV. 1925. pp. 1-200.
G. Coedès; Recueil des Inscriptions du Siam. Deuxième Partie: Inscriptions de Dvāravatī, de Crivjaya et de Lāvo. Bangkok. 1929.

② P. Pelliot; Deux itinéraires de Chine en Inde à la fin du VIII^e siècle. BEFEO. IV. 1904. pp. 223, 235, 360.
R. le May; A Concise History of Buddhist Art in Siam. Cambridge. 1938. pp. 21-34.

③ P. Pelliot; Textes chinois sur Prāyudhāraṅga. BEFEO. III. 1903. pp. 649-654.

④ G. Coedès; Recueil. II. pp. 1-3.

⑤ Mission Pavie, Indo-Chine 1879-1895. Etudes diverses. II. Recherches sur l'histoire du Cambodge et du Siam. 1898. p. 212. I. Fournereau; Le Siam ancien. Annales

- du Musée Guimet. XXXVII. 1895. p. 53. 露世Prince Dhani Nivat; The City of Thawarawadi Sri Ayudhya. The Journal of the Siam Society. XXXI. 1939. pp. 147-153. 參照。
- ⑨ P. Pelliot; Deux itinéraires. p. 223.
- ⑩ BEFEO. XXXVII. 1938. Chronique. pp. 686-693; XXXIX. 1940. Chronique. pp. 350-365.
- ⑪ H. G. Coedès; Some Notes on the Kingdom of Dvāravatī. The Journal of the Greater India Society. V. no. 1. 1938. pp. 24-30.
- ⑫ W. A. R. Wood; A History of Siam. (Revised Edition). Bangkok. 1933. p. 62.
- ⑬ G. Coedès; The excavations at P'ong Tuk and their importance for the ancient history of Siam. JSS. XXI. 1928. pp. 195-209.
- ⑭ W. P. Groeneveldt; Notes on the Malay Archipelago and Malacca. (Introduction 1876) pp. 121. 140.
- ⑮ 高橋駒吉氏「赤土國考」史學雜誌第三十一編「第十一號」大正九年十一月、九〇面—九〇六面。
- ⑯ P. Pelliot; Le Fou-nan. BEFEO. III. 1903. pp. 290-292. R. C. Majumdar; Suvarnadvīpa, (Ancient Indian Colonies in the Far East. II.) Dacca. 1937. pp. 76, 84-87. [H. G. Quaritch Wales;] Indian Art and Letters. IX. No. 1. (米氏)。E. Saldendaden; Recent Archeological Research Work in Siam. JSS. XXX. 1938. pp. 241-247.
- ⑰ G. Coedès; Apropos d'une nouvelle théorie sur le site de Srīvijaya. The Journal of the Malayan Branch of the Royal Asiatic Society. XIV. pt. 3. 1936. pp. 1-9. カネカキ・カネノ(松本信廣譯)「印度文化の東漸——西暦七世紀より十三世紀の間の南海帝國——」國語文化「第十七號」昭和十七年九月、五二—五三頁。
- ⑱ 藤田豐入博士「狼牙衛國考」(東洋學報「第三卷」大正二年)東西交涉史の研究、南海篇「昭和七年」一—三三頁。狼牙衛國の位置とていつ會ひ Pelliot 氏は Kra 地帯附近又は Tonasserim の地方を辨じ、Ferrand 氏は Igor 附坂と決定し、Coedès 氏は Keddah の地方を問題とす。彼は之を國を Parani 名に Keddah といふべきであると知らせり。P. Pelliot; Deux itinéraires. pp. 406-408. G. Coedès; Le royaume de Śrīvijaya. BEFEO. XVIII. No. 6. 1918. pp. 11-13. G. Ferrand; Malacca, Malayu et Malayur. JA. 1918. juillet-août. pp. 134-135.
- ⑲ Countries Neighbouring Burma, The Journal of the Burma Research Society. XIV. pt. 2. 1925. p. 180.
- ⑳ G. Coedès; Recueil. II. pp. 7-8, 41-42.
- ㉑ T'oung Pao. XIII. 1912. Bulletin critique. (P. Pelliot) p. 449. 藤田博士「唐宋時代南海に關する支那史料」(東西研究「大正二年」東西交涉史の研究、南海篇「四三—四四頁」。

- ②⑧ 藤田博士「前漢に於ける西南海上交通の記録」東西交通史の研究、南海篇、一二四—一三〇頁。G. Ferrand; Le K'ouen-touen et les anciennes navigations interocéaniques dans les mers du sud. JA. 1919. mai-juin. pp. 451-455.
- ②⑨ 山本達郎「東西洋と云ふ稱呼の起原に就いて」東洋學報、第二十一卷第一號、昭和八年十月、一〇七一—一八・一二九—一三二頁。
- ③⑩ 印度の形勢に關しては The Cambridge Shorter History of India. Cambridge. 1934. 參照。
- ③⑪ B. Karlgren; Analytic Dictionary of Chinese and Sino-Japanese. Paris. 1923. 日本語の音は Ancient Chinese *yo k'ia-fan* ヨキフン。
- ③⑫ E. Thurston; op. cit. 'Nayar', 'Toda'; H. H. Risley; The People of India. Calcutta. 1908. pp. 198-203. J. G. Frazer; The Native Races of Asia and Europe. London. 1939. pp. 198, 218, 219, 225.
- ③⑬ E. Thurston; op. cit. 'Nayar'; p. 312.
- ③⑭ V. Kanakasabhai; The Tamils eighteen hundred years ago. Madras and Bangalore. 1904. p. 118.
- ③⑮ 舊唐書卷一の天竺傳には、南天竺の王として遮婁其拔羅婆や尸利那羅伽寶多枝摩の名がみえり。前者の遮婁其は Chālukya の譯音、拔羅婆は varman の對音とせり。後者は Pallava 國の Narasimhapotavarman 王を指し
- たもの相違なり。尸利は *Yli* の對音であり、枝摩は拔羅の誤り也。K. V. Subrahmanya Aiyer; Historical Sketches of Ancient Deccan. I. Madras 1917. pp. 42-43, 46.
- ③⑯ 桑田六郎博士「三佛齊考」臺北帝國大學文政學部史學科研究年報、第三輯、昭和十一年九月、二二—二四頁。桑田博士は史料として唐會要を用ひて居られる。
- ③⑰ 杉本直治郎氏「天竺名支那傳來經路考」東亞論叢、第四輯、昭和十六年五月、四九—六三・七六頁。此の驃國の一名 *yo k'ia* と云ふ徒里彌・突羅米に關しては *K'yanzitha* の音譯の譯文とみえり。Thronl と云ふ民族名乃至地名が「應問題」なる *yo k'ia* の *Epi-graphia Birmanica* vol. III. pl. I. Rangoon. 1923. pp. 110, 142. G. H. Luce; The Ancient Pyu. JBRS. XXVIII pt. 3. 1937 p. 241.
- ③⑱ Pe Maung Tin and G. H. Luce; The Glass Palace Chronicle of the Kings of Burma. London. 1923.
- ③⑲ Epi-graphia Birmanica. vol. I. pt. 2. 1920. p. 73. C. O. Blagden; Etymological Notes. (V. Thaton) JBRS. V. pt. I. 1915. pp. 26-27.
- ③⑳ J. S. Furnivall; Notes on the History of Hanthawaddy. JBRS. III. pt. I. 1913. pp. 47-51. Pe Maung Tin; The Shwe Dagon Pagoda. JBRS. XXIV. pt. I. 1934. pp. 1-91.

- ① B. R. Peavn; A. History of Rangoon. Rangoon. 1939. p. 12. U May Ung; Some Mon Place-Names. JBRS. VII. pt. 2. 1917. p. 143. J. S. Furuvall; op. cit. p. 51. Sava Thein; Rangoon in 1852. JBRS. VII. pt. 2. p. 185.
- ② 桑田博士「三佛齊考」二四・三八—三九頁。
- ③ 宋江といふのは或は支那語を用ひた朱い川といふ意味の名稱で、その川とはメナム何を指してゐるかは不明である。
- ④ Reginald le May; A concise History of Buddhist Art in Siam. Cambridge. 1938. pp. 55-56. le May氏は陪諧の赤土國を以て Urdel に比定してゐるが、赤土國が此の様な地方になつた事は今更改めて論ずるまでもない。桑田六郎博士「赤土考」東洋學報、第九卷第二號、大正八年九月、三四七—三八二頁。高桑駒吉氏「赤土國考」史學雜誌、第三十一編、四・六・七・九・十一・十二號、大正九年四・六・七・九・十一・十二月。桑田博士「三佛齊考」一一一—四〇頁。
- ⑤ 桑田博士「赤土考」三五七頁。高桑氏「赤土國考」四六七—四六九頁。
- ⑥ G. Coedès; Documents sur l'histoire. pp. 23-26.
- ⑦ G. Coedès; Girivijaya. pp. 2-3.
- ⑧ ibid. pp. 16-17.
- ⑨ L. Finot; Notes d'épigraphie. BEFEO. XV. No 2. 1915. pp. 53-106. Un Empire colonial français, l'Indochine. I.
- Paris. 1929. p. 98. (G. Maspero). R. C. Majumdar; Champa (Ancient Indian Colonies in the Far East. I. (Lahore. 1927. Book III. pp. 41-44.
- ⑩ M. Reinand; Relation des voyages faits par les Arabes et les Persans dans l'Inde et à la Chine dans le IX^e siècle de l'ère chrétienne. tome I. Paris. 1845. pp. 98-104. G. Ferrand; Voyage du marchand arabe Sulaymân en Inde et en Chine. Paris 1922. pp. 98-102. K. A. Nilakanta Sastri; Śrī Vijaya. BEFEO. XL. 1941. pp. 270-271.
- ⑪ BEFEO. XXXIX. 1940. Chronique. p. 355.
- ⑫ 此の一文に於て論じた内容の或る部分は、昭和十七年六月に東洋文庫に於ける「モン民族に關する歴史的研究——特に Dvaravati に就いて——」と題する講演に於て、又他の或る部分は、同年十一月に史學研究會大會の「泰國及び緬甸の古史に關する二三の問題」と題する公開講演に於て、發表を行つたものである。陀洹を Rangoon に比定する考へは既に前者に於て發表した事を附記して置く。史學雜誌、第五十三編第九號、昭和十七年九月、一一二〇—一一二三頁參照。